林業樹種雑感
その７　ナラ

林野庁研究指導課　嶋　瀬　拓　也

■はじめに

外国産針葉樹ばかり５回も続けてしまったので，第７回の今回は，道産広葉樹，中でもその代表格である「楢（なら）」を取り上げたい。

道産広葉樹の代表としてのナラといえば，事実上，ミズナラといい切ってしまってよいのかもしれない。だが，生物学上の種名と商業名はしばしば一致せず，それにはそれなりの理由があるというのが，連載第１回以来，一貫して掲げてきた主張である。このこともあり，タイトルは「ナラ」とした。

結局，「まとめ」と胸を張っていえるほどにはまとまらなかったが，名前をめぐる雑考の締め括りという意味合いが１つ，そして，ナラのことを見聞きする中で得た気づき，より具体的には，①用途の多様性は重要であるということと，②「いい材」の基準は変わりうるということが，いま１つのテーマである。

■ナラ類の分類と世界的な分布

分類学的には，「ナラ」とは，コナラ属（Genus *Quercus*）コナラ亜属（Subgenus *Quercus*）コナラ節（Section *Quercus*）の落葉樹をいう。対して，「オーク（Oak）」は，もう少し幅広く，落葉樹と常緑樹の両方を含むコナラ属全体をいう。恥ずかしながら，昨年このことを教わるまで，「ナラとオークは同義で，商業上，国産または東洋産のものをナラ，外国産または西洋産のものをオークと呼び分けることがある」くらいの認識でいた。実際は，同じオークでも，ホワイトオークはナラと同じコナラ節だが，レッドオークは別の節（Section *Lobatae*）になるのだという。

さて，林産試験場の「道産木材データベース」によれば，本道には，ミズナラ，モンゴリナラ，カシワ，コナラという４種のナラが自生している（ただし，これらの種の分類には諸説あり，特にモンゴリナラをめぐる議論が活発である）。本州以南には，これらの種に加え，ナラガシワが分布しているが，いずれにせよ，世界を見渡したとき，わが国のナラ類の多様性はきわめて貧弱である。そしてそれは，コナラ節が，北米大陸に起源を持つためだという。コナラ節のうち，北米大陸から大西洋を渡ったものが30種ほどあり，そのうちの，さらにごく一部が，ユーラシア大陸をはるばる横断して，分布の東端となる日本に達した。つまり，本道のナラは，気の遠くなるような時間をかけ，地球上を半周以上もしてたどり着いた，希有な存在なのである。それが，本道の森林を代表する樹種の１つとなり，道内外の木材市場において重要な位置と高い評価を得てきたことに，感慨を覚える。

ところで，こうしたいわれのため，北米大陸は，世界でもっともナラないしオークの多様性に富む地域となっており，ホワイトオークとレッドオークは，いずれも100種以上が知られる。すなわち，「ホワイトオーク」や「レッドオーク」は，それぞれ100種以上もの樹種群を束ねる総称ということになる。また，このうちホワイトオークは，「米国西海岸」「米国中部から東海岸」「メキシコ」の３つのエリアに，特に分布が集中する。そして，これらのエリアごとに似た者どうしが混生しているため，互いに交雑を生じやすく，遺伝子レベルでは，その痕跡が多数確認できる。しかし，それにもかかわらず，種ごとの特徴はよく保たれているのだという。

写真１　ミズナラ（札幌市豊平区）

■樹種と商業名の関係

用途や価値が大きく異なれば，同じ樹種でも異なる商業名を持ちうること，逆に，手間をかけてまで分けるほどの違いがなければ，属の違いを越えて一緒くたにされうることについては，これまで，本連載で繰り返し述べてきた。ナラ類の分類と分布の話をはじめて耳にしたとき，まず頭に浮かんだのも，このことだった。そこで，米国産オークを扱っている銘木専門の材木店で，仕入れに当たって生産地をどれほど細かく区別しているかと，その理由について質問してみた。

結果は，やはりというべきか，生産地は，少なくとも州単位で区別され，その理由も，「××州や××州のホワイトオークは枝下高が低い」「××州のレッドオークは赤味が強い」というように，具体的なものだった。このような情報こそが，この商売の“飯の種”なのではないかと踏んで，質問を重ねてみたが，「買う側も売る側も，日本人も米国人もなく，関係者なら誰でも知っている」という。謙遜なのかもしれないが，額面どおりに受け取れば，“飯の種”ではあるにせよ，知っていれば超過利潤にありつけるというようなレベルの話ではなく，むしろ，この商売をするなら常識として知っておくべきレベルの話だということになる。

しかし，だとすればなぜ，呼び名で分けることをしないのか。あまりに多すぎて分けることを断念したのか，常に「××州産」というような産地情報がついて回っているのか，それとも，私が知らないだけでちゃんと呼び分けられているのだろうか。

さて，コナラ節だけで100種を上回る北米に対し，わずか４種の北海道であるが，種名と商業名の非対称は，やはり存在する。

道内のある林業事業体では，経営する山林から出材されるミズナラとコナラを，特に区別することなく，「ナラ」として出荷している。旭川林産協同組合北海道産銘木市（旭川銘木市）でも，「ナラ」と一括りで，カンバ類のような区別はない。

しかし例えば，近年需要が高まっているウィスキー樽材では，明らかにミズナラが好まれる。戦時中，ホワイトオークやヨーロピアンオークの代替として使われたのが始まりとされるが，近年では，ミズナラの樽で熟成された原酒には独特の風味があるとして，商品名に「ミズナラ」を冠したウィスキーの発売が相次ぐなど，ミズナラであること自体が差別化要素として意味を持つようになっている。もちろん，立米10万円台後半が普通で，20万円の大台超えも珍しくないウィスキー樽材の買い付けを，目利きのできない人が担当することはありえない。したがって，仮にコナラと一括りにされたところで，そのことがただちに問題となることはありえない。しかし，この価格帯の玉まで，あえて一括りにする必要もないように思う。

逆パターンもある。具体的な品目は控えるが，「オーク」製を謳うある人気商品に，外国産ナラ類とともに道産ナラが使われている。メーカーは，必要とする量が確実に調達できるならば，「道産ナラ」製として売り出すことも考えたいとしている。ロット（量のまとまり）の重要性については，前回（その６）にも少し触れたが，今回のケースもまた，ロットの問題が差別化の機会を逃す原因となりうることを示している。

ところで，広葉樹に接するようになった頃から，時折，「イシナラ」という名を耳にするようになった。この「イシナラ」には，私が聞き回った範囲だけでも，①コナラの別名とする説，②ミズナラのうち，加工や利用に差し障りがあるほど硬いものをいうとする説，③雑種とする説の３つの説がある。なお，３つ目の雑種説は，さらに「ミズナラ×コナラ」説と「ミズナラ×カシワ」説に分かれる。

このように，「イシナラとは何者か」に関しては諸説あり，しかも，この問いに何らかの答えを有する人の多くは，自らの見解に強い自信を持っている。どの説にも共通するのが，「硬すぎて使いづらい」という点だが，①のコナラ説支持派に言わせれば，「もともとコナラはミズナラより硬い」のであり，②の硬すぎるミズナラ説支持派に言わせれば「環孔材であるナラは，成長がよすぎると，ぬか目と逆の理屈で硬くなる」のであり，③の雑種説支持派は，「ミズナラより硬い樹種との雑種であるから硬くて当然」なのである。いずれもそれなりに筋が通っているので，どの説の支持者も揺るぎないのだろうと考えている。

そして，あくまで可能性だが，このうち複数の，あるいはすべての説が正しいのかもしれない。証拠はないが，まったくの当てずっぽうというわけでもない。手がかりは，「イシ」という接頭辞にある。私の“木の先生”である材木店のご店主によれば，「木材では，劣るものや代用材，似ているものに『イシ』や『メ』をつけ」るという。連載「その１」で示した，カンバ

類の種名と商業名の関係を思い返していただきたい。ウダイカンバ，ダケカンバとも，価値に応じて２つの異なる商業名を持ち，しかも，同一樹種内で価値が低い方は，それと同程度の価値しか持たない他の樹種と一緒くたにされていた。これとまったく同じ理屈で，ナラ本来の用途に応えうるものが「ナラ」，それに耐えないものが「イシナラ」とされたのかもしれない。

結局，最後までうまくまとまらなかったが，種名と商業名の問題は，これで一応の区切りとする。

■「いい材」の条件

年10回開催の旭川銘木市に，24回通い続けたところで転勤を命じられた。目標だった３年分の連続データは得られなかったが，とても勉強になった。中でも大きかったのは，①多様な用途の存在がいかに重要かということと，それとも関連して，②「いい材」の評価基準は変わりうるということへの気づきである。

銘木市では，ナラに限らず，どの樹種にも，用途や価値に応じた価格序列が存在する。一般に，もっとも高いのが一枚物天板・突板向け，次いで積層材・ロータリー単板向け，さらに家具用製材向け，単層フローリング向けと続き，これらの用途向けとしては買われず，木材チップ用材相当の価格で落札されたり，不落となったりするものもある。メジロカバやイタヤには楽器用材，シナには合板用材，シラカバには成形合板中芯用材というように，樹種ごとに特徴的な用途を持つ場合もあるが，それらの特殊用途も，それぞれに価格帯を形成し，序列のどこかに位置づけられる。

重要な点の１つは，この序列が，径級や欠点の有無といった一般的な尺度のみで決まるとは限らないことである。それを端的に示す例が，先に取り上げたウィスキー樽材である。もちろん，原酒が漏れては話にならないので，「通直である」「目が通っている」「節がない」といった，一般的な“いい材”の条件を満たしている必要はある。しかし，それらに加え，他の用途にはありえない「原酒に移る木香（きが）」という評価基準が，この用途においては決定的な意味を持つ。そして，そのことが，他のどの樹種でもなく，ミズナラが欲しいと需要者に思わせる動機になっている。

いま１つの重要な点は，材の供給状況に応じて，あるいはそれとまったく独立して，需要も変わりうるということである。昔を知る人に，いまの銘木市の写真を示すと，ほぼ確実に，ひどく驚かれる。それほどまでに出品材が細くなってしまったということである。しかし，需要もまた，不変ではない。例えば，旭川では，源平入り交じったナラの幅はぎ材を，地色が分からないほど濃く着色したり，あるいはそのまま意匠として用いたりした家具が作られるようになっている。家具工房で伺ったところ，「たしかに，手に入る材料の品質低下が，このような家具を作り始めたきっかけではあるが，消費者のニーズが多様化した結果，源平や節を“現し”にした家具への需要は高まっており，いまや欠かせないラインナップの１つ」なのだという。

以上の２つの例は，新たに生まれた評価基準の下では，従来の評価基準による位置づけよりも高い価格帯に位置づけられる可能性があることを示している。このような意味でも，多様な用途の存在は重要なのである。

■おわりに

かつて，良質なオーク材として欧州に輸出され，また，旭川に家具産業が発達する資源的基礎ともなった道産ナラであるが，昔を知る人の言葉を借りれば，山も木も，見る影もないほど悪くなってしまった。「今日入手可能な道産ナラは，かつてのそれとは非なるものだ。新たな需要というが，大方，“道産ナラ”や“ミズナラ”の名前が欲しいだけのものではないか」という厳しい意見もある。だが，山の木は，ゆっくりとではあるが，確実に回復に向かっている。そして，従来は考えられなかったような評価基準を持つ需要が生まれていることも事実である。50cm上の“良材”がふんだんに出てくる状況にはまだない。しかし，いま供給可能な材と，変わりつつある需要とがうまく擦り合わせられ，森林資源に価値を付けて世に送り出す大切な仕組みが今後も維持されるように願っている。

謝辞　本稿の執筆に当たり，森林総合研究所北海道支所の永光輝義博士より，多くのご指導をいただいた。記して謝意を表したい。なお，残されたすべての誤りは筆者の責に帰するものである。